# 訪問看護ステーションにおける臨地実習

◎鈴木 真紀子 [1)]
四日市看護医療大学 [1)]

【背景】臨床検査技師を取り巻く社会環境の変化に対応するため、令和 4 年度入学生より、臨床検査技師養成施設の教育内容と教育目標が改正された。特に卒前教育として最も重要な臨地実習において大幅な改正があり、臨地実習施設において在宅を含む業務、施設内のチームの役割と実施内容を理解することを必修化すると明示された。在宅医療は、「第 3 の医療」とも言われ、今後増加・多様化すると予測される。医療の現状が大きく変化する中、臨床検査技師を目指す学生においても、在宅医療を学ぶことは必要不可欠である。

本学は三重県四日市市に令和 2 年度に新設された臨床検査技師養成施設である。四日市市は、全国的にも在宅医療の整備が進んでおり、現在、自宅、施設での看取り率は全国平均と比べても高い地域として知られている。この四日市市で新設された本校は、地域医療に貢献できる臨床検査技師の育成が 1 つの目標であり、在宅医療に関連する臨地実習を開設時より計画していたことが背景にある。本学では 3 年次 6 月から臨地実習に臨む。同学年で、全員に対して訪問看護ステーションにおける実習を必須とした。今回、これまでに 2 学年、計 76 名の学生が、訪問看護ステーションの実習を行ったので紹介する。

【方法】本学では、2 年間で計 76 名の学生が、以下の通り訪問看護ステーションでの実習を行った。本学では同行実習にこだわり施設側に依頼をしている。

・令和 4 年 6 月 1 週間、1 期生 22 名（ワクチン未接種学生 1 名を除く）が、1 人 3 施設の訪問看護ステーションの中から 1 施設、1 日（1 件～3 件）の同行実習を行った。

・令和５年 6 月、11 月、12 月、2 期生 53 名が、1 人 5 施設の訪問看護ステーションの中から 1 施設に 1 日（1 件～3 件）の同行実習を行った。

【事前・事後学習】

臨地実習の事前学習として実施している接遇、個人情報の取り扱いに加えて、訪問看護ステーション実習に特化した「臨床検査技師の在宅医療の参入」の講義 1 コマ、看護学科による「在宅医療のニーズ拡大と現状」「訪問看護の役割と機能」の講義 2 コマ、「訪問看護の実際」の演習 2 コマを実施した。演習では、実際に学生が訪問看護師と同行するシミュレーションを行い、意見交換をした。2 年目は、前年度学生のアンケート調査をもとに、「同行の実際について」の講義を 1 コマ追加した。

事後学習は、次年度臨地実習に臨む学生の出席が必須である「臨地実習後演習」と称した科目において、実習内容及び、在宅医療において臨床検査技師としてどのように介入できるのかを考え、まとめて発表し、情報共有した。

【結果】学生の在宅医療に関する知識が向上したことは勿論、多くのことを学び、考えることができた。
学生アンケート調査にて、76 名中 11 名の学生が、将来的に在宅医療に関わりたいと回答した。在宅医療が学生の将来の選択肢の 1 つとなり、学生の視野を広げることができた。

【課題】学生のアンケート調査結果を受け、事前学習を検討している。特に、現体制は実習担当者が訪問看護師であるため、在宅医療に携わっている臨床検査技師の講義の必要性を感じ、今後の課題としたい。また「体位変換」「バイタルチェック」等の事前学習も検討している。
今年度より、試験的に施設側に学生評価を依頼する予定である。訪問看護師に学生の評価を依頼することで、学生に足りない知識や、マナー、態度等を見出し、具体的にフィードバックできることを期待している。

【結語】訪問看護ステーションでは、実習指導者が臨床検査技師ではないが、在宅医療を学び、体験する場として重要である。
学生自らが目指す臨床検査技師の役割を再確認する場としても有効であった。
学生にとって多職種理解につながるだけではなく、施設側にも臨床検査技師を理解してもらえるメリットがあった。

連絡先―四日市看護医療大学 059-340-0700